

世界の地図図書館 — 成立と概況 —

鈴木 純子

はじめに

- 1 地図図書館—成立と発展
 - 2 各国地図図書館の概況
 - (1) ディレクトリーに見る各国の地図図書館
 - (2) 地図図書館の運営
 - 3 地図図書館学の発展
 - 4 地図図書館学の現況
- 終わりに

はじめに

近頃、われわれの身近で地図についての話題が目につれる機会は増えているように思われるものの、地図と図書館のかわりについての認識がそれとともに深まるというところまではいっていない。しかし、「人間をめぐる世界の、事物、概念、状態、過程、現象などを場所との関係で把握することを補助するグラフィックな表現物」⁽¹⁾などと定義される地図がこれらのもろもろのことどもに関する情報の媒体として、言葉や文章とは比べものにならない可能性を持っていることは、事実である。広く知られた寺田寅彦の随筆「地図をながめて」⁽²⁾は、地図の優れた情報伝達機能をモチーフとしている。たとえば、「いま、かりに地形図の中の任意の一寸角をとって、その中に盛り込まれただけのあらゆる知識をわれらの「日本語」に翻訳しなければならないとなったらそれはたいへんである。等高線ただ一本の曲折だけでもそれを筆に尽く

すことはほとんど不可能であろう。それを「地図の言葉」でよめば……」という具合で、そのような豊かな内容を持つ地図は、図書館の資料として確かな意義を持つものといえるだろう。

地図の利用は、道案内や位置関係の確認といった日常的なものから、地理学をはじめ地域や地理的分布、配置等を問題にする研究の諸分野、行政や収税の基礎資料など、さまざまな目的で広く行われる。また、過去の地図を用いて同時代の地域の状況やそれについての認識、表現の変化を読みとる可能性も地図の資料的価値を高めている。さらに、形態からいって破損し、廃棄されやすい地図を組織的に保存し、利用に備えるという点でも地図は図書館資料として重要なものであるということが出来る。

ところで、地図とってまず思い浮かぶものはどんなものだろうか？ 折り畳まれた市街地図や地形図などの一枚ものや、参考図書として、あるいは教室で使われる地図帳の類などであろう。相当部分は事実これでカバーできるのだが、地

図図書館の扱う資料としては、地球儀・天球儀、また地形模型などとあわせて、近年では、空中写真、衛星画像もあり、これらは全体として地図資料 (cartographic materials) と呼ばれている。さらに、磁気テープ等に取められた数値地図 (理) 情報といったようなものも視野に入れておく必要がある。

地図の資料としての価値に疑問はないとしても、図書をはじめとする文献資料と比べれば、図書館内でマイナーな存在であることには相違なく、そのため活動も思うにまかせないことを慨嘆する声は随所にあるものの、欧米諸国においては、長い歴史に支えられて、地図の図書館への認識は日本とは比ぶべくもなく確立しているかに見える。1990年夏から秋にかけて筆者は、ストックホルムにおけるIFLA大会への参加を出発点として、イギリス、オランダ、アメリカ合衆国 (Washington, D.C. 周辺のみ) のいくつかの地図図書館を訪れる機会にめぐまれた。これについては、「国立国会図書館月報」No. 361 (1991.4) でも報告を行ったが、紙面の関係で割愛した部分も多い。その拾遺ともいうべきものを加えながら、欧米における地図図書館の概況を、背景となる歴史にも多少ふれながらまとめてみたい。

1 地図図書館一成立と発展

ここではさしあたり、18世紀末～19世紀前半頃から出発したい。これよりさき、15,16世紀、ルネッサンスの頃にはすでに、未知の世界への興味や、歴史的資料への関心が高まり、航海や探検、土地や水路測量の進展にともなう地図の作成量

の増大と多様化などもあいまって地図、地域資料の意識的な蒐集が行われるようになり、英国図書館に架蔵される Robert Cotton 卿のコレクション (地図を含む) のように、今日に引き継がれるコレクションの発生も見られるものの、その動機はどちらかといえば私的な興味であった。19世紀前半、1828年にはフランスの国立図書館、1844年には大英博物館内に地図の専門室が設けられている。ただし、これ以前にも図書館内で地図の利用がなされなかったわけではなく、例えば大英博物館では、創設の基礎となった Cotton 卿、Sloane 卿らのコレクションにすでに地図が含まれており、それらを利用するため大型テーブルを購入したことが設立から間もない頃の記録に残っているというが⁽³⁾、専門閲覧室の開設によって公共的な地図の利用の環境が確立し、「地図図書館学」の基盤が整えられたといえる。これらの背景には、18世紀を通じて、土地利用の集約化、新しい植民地の経営などのためにさかんに行われてきた測量や地図作成の成果の蓄積を見ることができる。特にその後半における近代的、国家的規模の地図作成の本格化、例えば、フランスにおけるカッシーニ一族の1:86,400地形図作成(1750—、ちなみに、これらの基礎となる三角測量を用いた測地事業は17世紀中頃に開始されている)や、イギリスにおける陸地測量部 (現在の Ordnance Survey, 当時の名称は Trigonometrical Survey) の創設等によって、地図の作成量が著しく増大したことに注目しておきたい。なお、新興のアメリカ合衆国政府が国による地形図作成を決定したのは1807年のことである。

フランス国立図書館の初代地図室長と

なった Edme François Jomard は、歴史的ドキュメントとして、過ぎ去った時代のポルトラノ海図等を収集する一方、同時代の地図、特に自国内で作成された地図の網羅的な収集と保存を収集の指針として確立しており、近代的な地図図書館の蔵書構成への第一歩をしるしている(4)。

世界最大の地図図書館であるアメリカ議会図書館が、初めて地図の専門室 (Hall of Maps and Charts) をもったのは1897年とやや遅れるが、同館設立 (1800) 直後の購入資料リストの中にもすでに地図が含まれており、これらの通常の収集以外にも、Peter Force コレクション、Faden コレクションなど、地図または地図を含むコレクションの購入もあって、蔵書構成の要素として地図が早くも一定の位置を得ていたことがうかがえる。一方、館外にあっても、1853年夏のアメリカ科学振興協会の年次大会における E. B. Hunt の、「歴史、科学、商業、政策立案にますます必要性の高まる地図、地域資料の包括的コレクションが国内にない」ことを指摘し、「新たに備えるべき場所としては議会図書館が望ましく、体系的なインデックスやカタログを備えて目的に応じた資料の迅速な利用を可能にすべきである」という趣旨の発言、また、ドイツの著名な学者 J. C. Kohl のスミソニアン協会での1856年の講演における「議会図書館内に国家的な地図のデポジットをつくること」にふれる発言、イェール大学教授 D. C. Gilman によるアメリカ地理学協会誌 (1872) の記事など議会図書館内に地図のセクションを作することを望む声が相次ぎ、以後の発展への確かな動機をなしている(5)。以上はい

ずれも大図書館の例であるが、規模の違いこそあれ、同じ社会的環境の中で大学、公共、地理学協会などの地図コレクションの活動も、この頃から次第に形が見えてきている。

二度にわたる世界大戦、中でも第2次世界大戦中の大量の地図需要は地図図書館の発展の大きな要因となった。この時期までにかかなりの蓄積ができていたことは、すでにみたとおりであるが、これらが作戦の立案や、兵士を送りだした家族に利用されることによって地図図書館に対する社会的認識が飛躍的に高まる一方、戦争の遂行に関連して大量に集められたり、新たに作成されたりした地図類が戦後、最終的な保管場所として図書館に収められたこともあって、現在の地図図書館の姿はこの時期に確立したといつてよい。地図所蔵機関の増加や各機関における所蔵資料の急増は、地図の整理や保管、より充実したコレクションの構築等の方法についての関心の増大につらなり、地図図書館学もこの時期に一つの専門的分野として成立したといえるだろう。地図図書館学の発展については後であらためてふれることにする。

2 各国地図図書館の概況

(1) ダイレクトリーに見る各国の地図図書館

IFLA (国際図書館連盟) 地理・地図図書館部会 (後述) の編集になる *Directory of map collections in the world* 2nd ed. (München : K. G. Saur, 1986. IFLA Publications 31) は、65か国、670機関の地図コレクションについて、所在地、略史、職員構成、コレクション (サイズ・

特色・特別コレクション)、整理の方法、出版物(目録・書誌・ガイド)等を、それぞれの機関からのアンケート回答に基いて国別にまとめている。アンケート送付先の選定や回答の記入法にある程度の不均衡はあるものの、全世界的なマップライブラリーの概況を、これによって一覧することができる。第三版の刊行も近いはずである。

地図資料の所蔵機関としては、国立、公立、大学など一般の図書館のほか、大学の関係学部、各国の地図作成機関、その他の行政や軍関係機関、地理や歴史関係の学協会、また国公立の文書館、場合によっては博物館などをあげることができる。

上記のダイレクトリーによって国別の収録機関数をみると、ドイツ(当時の2か国合計)の154、アメリカ合衆国の83が際立って多く、以下、オーストラリアの38、イタリアの27、イギリスの25、カナダの22などが続く。20弱の所がオーストラリア、フランス、ハンガリー、ポーランド、スイス、南アフリカ、やや離れて10前後が、ベルギー、ニュージーランド、アルゼンチン、オランダ、スペイン、ユーゴスラビア、チェコスロバキア、日本といったところである(20以下のものは、同数のものもあるが多い順)。日本以外のアジア諸国は、イスラエル4、インド3、韓国2、香港、イラク、レバノン、台湾、タイの各1となっており、中国に関しては情報が含まれていない。なお、ソ連(当時)についても、この第二版用のアンケートには回答がなかったため第一版から転載したとして、4機関のみが古いデータで記載されている。国の広さや人口、バックとなる図書館の普及度なども勘案

する必要がある、単純に数だけ並べてもあまり意味はないかもしれないが、それでも収録数の多い所では、地図図書館の概念も確立し、相互の連絡、自国内での名簿の整備も進んでいるということではきょう。

一枚ものの地図の所蔵枚数は、米国議会図書館の368万が群をぬくが、ほかに多いところとして、米国国防地図局(Defence Mapping Agency)160万、英国図書館、140万、米国国立文書館、スコットランド国立図書館、カナダ国立文書館各100万、英国国防省96万、オックスフォード大学95万などがある。次いで60万前後のフランス国立図書館、ケンブリッジ大学、30-50万クラスとして、プロイセン文化財図書館、オーストラリア・ニュージーランド・ドイツ(旧東ベルリン)の各国立図書館、アメリカのいくつかの大学が並ぶ。一枚ものの地図の所蔵数からいえば当館はこのクラスに入る(平成3年度末現在約36万枚)。以上の所蔵概数はダイレクトリーの数字をもとにしたものだが、その出版年は1986年であり、アンケート、編集等によるタイムラグを考えるとおよそ10年前の数字である。現在は米国議会図書館460万、英国図書館200万、オックスフォード大学113万などとそれぞれに所蔵数をのばしており、他の諸機関も同じような増加がみられるはずである。なお、B. FarrellおよびA. Desbarats(1990)⁽⁶⁾によれば、上記のIFLA版、およびカナダのダイレクトリーから抽出した650機関のうち、13%は所蔵数5万枚以下、67%は5~10万枚で、残る10%が20万枚以上であるという。

所蔵数としてここでは一枚ものの地図(map)をとりあげたが、地図図書館の

所蔵する資料には前記のように地図帳、空中写真、マイクロ資料等がある。地図帳では、米国議会図書館45,000、英国図書館32,000、フランス国立図書館10,000などが大きい。空中写真は点数が非常に多く、アメリカ合衆国の地形図作成機関でもある合衆国地質調査所は1,500万、国立文書館230万(過日訪問した際の説明では900万とのことであった)といった大きな数字が出る。国の作成する地籍図などの大縮尺測量図がマイクロ資料として供給される例もあり、ニュージーランド国立図書館は、一枚物の地図30万枚のほか、マイクロ資料90万点を持つ。イギリスでも地形図作成機関である Ordnance Survey が1,250分1, 2,500分1 測量図を、アパチュアカードの形で英国図書館をはじめとする五つの納本図書館に供給しているというように、資料群ごとに、さまざまなランクが認められる。

当然ながら、所蔵数の大きい機関は、単に数が多いというばかりでなく、さまざまな経緯で集められた貴重な図も保有する重要なコレクションであるといえる。一方、資料の絶対数は少ないものの、例えばオランダのライデン大学の古地図コレクションのように、約6万枚の所蔵図のうち、25%が1500-1699年作成、69%が1700-1849年作成、残る15%が1850年以後の作成にかかるものといった特色あるコレクションもある。ある地域の地図を必要とする場合、その要求は絶対であって、たとえ隣であっても別の地域の地図では代用にならないという地図の利用上の特質から、国立図書館クラスの包括的コレクションの存在意義は非常に大きい。その反面、小なりといえども、所在地周辺に関する資料を深く集めることの

可能な各地域の機関の存在意義も、地図の場合はその利用の態様からいってかえって大きいといえるだろう。

(2) 地図図書館の運営

主としてIFLAによるダイレクトリ一にもとずいて、世界の地図図書館の概況をまとめてみたが、数字ばかりでいささかわずらわしい。視点をかえて、これらの地図図書館のごく日常的な運営の状況について、急ぎ足の訪問で見聞したところからいくつかすくいあげてみよう。

日本に限らず、地図図書館は全般に数が少ない。英国図書館の利用が資格審査をとまなう許可制であることはよく知られているところだが、同館地図図書館は地域や所属の公共、大学図書館で求める資料が得られないことなどを前提とする利用許可制はとっているものの、ほとんど即時に許可のとれる、地図図書館のみに有効な‘Temporary pass’の制度があって、一般の図書利用よりはるかに開放的となっている。「地図に関しては最後の拠り所であると同時に最初の拠り所でもある」ことを運営の基本としており、同館の年齢制限18歳以上についても、しかるべき理由があれば、弾力的な運用が行われているということである。スコットランドの国立図書館でも考え方は同じで、他で資料が得られない場合、教師らの紹介による事前の承認と同伴者があれば、小学生でも利用が可能だという。

地図資料の場合、利用者が必要な資料に到達するためにスタッフが果たす役割は、図書、逐次刊行物など通常の図書館資料より一般に大きいといえよう。地図の検索を文献の検索と比べると、文献の検索に大きな部分を占める著者、書名等

による特定資料の検索は、地図の検索の場面では非常に少なく、地域、主題、年代、精度など必要な条件を備える地図を求める、いいかえれば地図に盛りこまれたインフォメーションそのものに直結する案内が求められるケースが非常に多いことがその原因と思われる。整理技術の研究も行われてはいるものの、個々の地図が備えている情報をあらゆる角度から分析、記述し、検索可能な状態しておくことは人手や時間の点で困難であり、資料や目録に通じたスタッフが、利用者の要求を聞きながら、検索方法のアドバイスをを行い、時には適切と思う数種の資料を呈示して、その中から選んでもらうといった接し方も必要となる。1987年に新築されたばかりのモダンな分館内に位置をしめるスコットランド国立図書館（エジンバラ）地図室は、こうした利用者とスタッフの接触を必然的なものとして、あえて職員の仕事用のスペースと閲覧用のスペースの区分をせず、随時両者のコミュニケーションができるような設計となっている。ケンブリッジ大学図書館の地図室も同様である。

収集については、米国議会図書館や英国図書館は包括的ないしそれに近いものを目指す、同じイギリス国内で納本図書館でもあるスコットランド国立図書館は、可能な限りの包括的収集をあげながらも、特に、スコットランドおよび北イングランドについての完璧な収集と、エジンバラを本拠とするイギリスの代表的地図出版社、パーソロミュー社の地図の完全カバーを期し、さらに、移住者等で関係の深いカナダ、ニュージーランドを重点とする基本方針をもち、オックスフォード大学図書館地図室は全世界の地形

図の収集を目指す、縮尺は5万分1以下のものと限定するというようにそれぞれの基準を設けている。アムステルダム大学図書館地図室は外国の地形図について、ヨーロッパは5万分1、その他は20万分1程度と収集図の縮尺に基準を設定している。古地図については、オリジナルのものは高価になり過ぎて、いずれもその購入には困難を感じているが、旧来の豊富なコレクションを基礎にもつ英国図書館、米国議会図書館などは、その欠を補い、さらに充実させるため、今なお古地図収集にも意欲的である。英国図書館では、専門職として目録作成に責任を持つ4人の職員のうち2人は古地図担当となっている。余談ながら、国際地図学会地図史部会の機関誌 *Imago Mundi* (年刊) には、主要図書館の入手した古地図のリストが掲載されており、興味深い。一点限りの出物を待つ古地図はもちろん、新刊の地形図類でもストック切れが早く、収集のための予算の運用にはいずれも頭を痛めている。訪問した大規模館ではそれぞれ外国の地形図も一通り揃えており、一定期間ごとに更新しつつ蓄積していくことを考慮しているが、費用やスペースなど困難な問題をかかえている。なお、米国議会図書館では外務省、英国図書館（およびスコットランド国立図書館などの納本図書館）では国防省がそれぞれの任務遂行のために収集した資料を、用済み後図書館へ移管する制度が確立されており、具体的な金額は知り得なかったが、現代の外国の地形図、都市図等の収集のための図書館としての予算は多額ではないということである。

地図の目録は基本的には図書と異なるものではないが、図書と比べて資料上の

書誌的事項の表示が分散していたり、不明瞭であったりするものが多く、記述の統一はなかなか難しい。また、目録記述には縮尺、緯経度などの数値データ、形態に関して、図の大きさ（縦・横）、色の有無など、独自の要素を加える必要がある。さらに、地形その他の表現法や地名・街路名等の索引の有無など注記の望ましい項目もある。このほか、地図の目録に特有の厄介な問題は、シリーズ地図の扱いである。シリーズ地図とは、実例でいえば国土地理院の2.5万や5万分1地形図のようなものをいう。「日本の5万分1地形図」といった総合タイトルのもとに「東京東北部」といった多数の地図が作られているもので、これらがシリーズの構成部分であると同時に独立した一枚の地図でもあるという性格も持っている。多くの場合、各図の出版は一回限りではなく、年代を追って修正再版される。その時々地域の状態を写した、それぞれの年次の地図の蓄積が地図図書館にとっては大きな財産ともなり、普通の地図図書館の資料構成からいうとおよそ70~90%がこの種の資料とされているが、目録を維持するという点でなかなかの難物である。1シリーズ1レコードで、個々の図の所蔵は、これまた特有の検索ツールである索引図（一覧図）上のチェックで表示する方法がとられることが多いが、資料の蓄積が進むにつれてこれだけでは不十分になり、個々の図についてのシェルフリストなどを作って、修正版の所蔵状況を記録しなければならなくなる。こうした特性から、機械化を進めるにあたっては、階層を分けた入力が見られるなど、図書中心に開発されたフォーマットにはなじみにくいという問題をか

かえている。

英国図書館では、シリーズ地図については現段階では1シリーズ1レコードとなっている。スウェーデンでは2階層を用いてシリーズと各構成図の記録を行っている。目録記述に関しては、基礎として国際標準書誌記述〈地図資料〉(ISBD〈CM〉)があり、実際の作業にあたっては英米目録規則第二版の第3章地図資料とAnglo-American Cataloguing Committee for Cartographic Materials (英米地図資料目録委員会 Hugo I.P. Stibbe ほか)がまとめたマニュアル⁽⁷⁾が広く用いられている。ただし上記の、シリーズ地図の扱いについては、この規則は十分とはいえない。

分類法は多種多様で、地図の分類の難しさをあらためて感じさせられる。分類の第一の要素は地域で、これに主題等を組み合わせる点は共通であるが、議会図書館分類表G門が合衆国内でかなり普及しているのを除けば、なかなか決め手はない。オックスフォードはParsonsの表⁽⁸⁾、オランダ王立図書館はUDCなど、各館各様である。英国図書館の機械可読目録は、大小の地域名に主題を組み合わせさせて検索するケースが一般的だが、個々の地名を読みでなく、階層的(hierarchical)に把握するためには、DCを援用している。

一枚ものの地図は一般に抽出しの浅い大型のキャビネットに水平に重ねて収納しているが、キャビネットの上を閲覧テーブルに使っているところも見られる(エジンバラ大学図書館、ケンブリッジ大学図書館)。オランダの王立図書館(ハーグ)は新建築を終えたばかりで、この地図キャビネットは、アルミのフレ-

ムに、底板は有害な添加物のない透明アセテートフィルムという斬新、軽量のものであった。キャビネット内部にじかに地図を収めず、適当な数ごとにフォリオには喜んで収めているところも多い。米国会図書館の地図庫は長い方の一辺が200メートルを越えるという巨大なもので、5抽出のキャビネットを現在3段(15抽出)積んで使っているが、資料の増加にあわせてさらにもう一段積み上げる計画という。大変な収納力である。大型のアトラスを水平に保管する棚は、棚板が「ころ」になっていて重いアトラスでも容易に、綴じを痛めることなくとりだせる。いささか話が細かくなってしまったが、設備の新しいスコットランド国立図書館では、閲覧、作業用のテーブルにも、縁の部分に地図を痛めないための工夫がこらされている。また、ワシントンの国立文書館で使っていた一枚ものの図面搬送用のトロリーは古いものだが、台の中央部を浅く湾曲させて、図面が移動中にずり落ちるのを防ぐ構造になっている。

破損しやすい一枚ものの地図の保存対策は、収納や利用面での配慮からはじまり、和紙や布による裏打ち、ものによってはフォリオや保存箱など多くの工夫のうえになりたっている。二枚の透明フィルムによるパウチはアメリカの議会図書館や文書館では多用されている。利用中の汚れや破損防止のため、地図の上に必ずこのフィルムを重ねて、その上から閲覧させているところもある。スコットランド国立図書館では、古版地図のマイクロ化を終えているが、アパチュアカードのみでなく、紙焼きも同時に作成して利用の便宜をはかっている。

目録の機械可読化やネットワークにつ

いては前記月報にやや詳しく報告したのでここでは省略する。

3 地図図書館学の発展

1946年から1978年まで米国会図書館地図部にあつてその部長もつとめ、第2次世界大戦後の地図図書館のめざましい発展のトップリーダーであつた Walter W. Ristow による 'Maps in libraries: a bibliographical summary' (*Library Journal* no. 76. Sept. 1. 1946 p. 1101-7) によれば、*Library Journal* 16巻3号(1891)に地図コレクションについてのフォーラム 'How we keep unbound maps' のペーパー5編が掲載されている。同誌には次いで、初期の地図図書館の内情をうまくいいあらわして、現在でも時にそのタイトルが引用される、H. C. Badger (1884 Harvard 大学地図司書となる)の 'Floundering among maps' (同17巻9号 1892)が見え、以後各種の関係誌に地図の取扱いをテーマとする記事が現れる。時期的にはちょうど米国会図書館の地図セクションの創設(1892)に重なっており、地図を図書と分離して維持するかどうか自体が一つの問題点となっている。ひき続いて、地図の保管、整理に関する記事が散発的にみられるが、従来の図書整理の枠組みの中で地図をどう扱うかといった観点のものが多い。こうした中で大図書館で地図室を持つところも現れ (New York Public Library 1911など)、地図のセクションを別に作る考え方が次第に定着してきたようである。

第1次世界大戦後、とくにアメリカでは地理への関心が高まって、大学の地理

学科の新設、拡大がさかに行われ、組織された地図図書館の必要性も次第に認識されるようになるが、それでもさきに引いた Ristow が New York Public Library の地図室長の職を得て、地図図書館員としてのキャリアを開始した1937年当時、アメリカ国内で一人以上のフルタイムの職員を持つ地図図書館は、30以下だったという⁽⁹⁾。

1930年に入ると、アメリカでは、1930年に Williams による参謀本部地図コレクションの分類表⁽¹⁰⁾、1932年には後に SLA から出版され、現在もカナダ、オーストラリア等で広く用いられている Boggs と Lewis の分類表 (1945年出版、目録法も含む)⁽¹¹⁾ が発表され、イギリスでも地域中心の地図整理を指向する、王立地理学協会地図室長 G. R. Crone による 'The cataloguing and arrangement of maps' が *Library Association Record* 38巻, March, 1936に掲載されるなど、地図整理に関する本格的な取組みが出現する。Boggs は同じ頃、アメリカ地理学会、次いで国際地理学連合の大会で地理学関係資料の分類と目録に関する報告を行っており、これらの資料の取扱いへの関心の広がりを感じとれる。

第2次世界大戦とその地図図書館への影響はさきに述べたとおりで、現代の地図図書館と地図図書館学の直接の出発点となっている。

4 地図図書館学の現況

英語の 'map librarianship' または 'map curatorship' を地図図書館学というのは少々大仰なのではないかとも思うが、なかなか適切な表現が見つからない

ので仮にこう云っておこう。地図図書館学といっても、地図を収集し、組織化し、さらに有効な利用を可能にするためのレファレンスや、目録・書誌の整備など一般の図書館学と重なる部分も多いが、地図という資料の特性からくる違いもまた大きい。それらの点については、簡略ながら「地図図書館の運営」の項でふれている。

'map library' を地図図書館といういかたもまた、日本語の語感としては必ずしも実態に即したものとはいえないかも知れない。特別に大きい所は別として、大部分は地図課、地図室などといったイメージである。職員も一人とか二人のものが多く、さきに引いた B. Farrell および A. Desbarats (1990) をふたたび引けば、スタッフの数は、同じく650機関中、28%がパートタイムのみ、45%は1-2名のフルタイム、13%が3-4名で、これを越えるのは14%である。米国議会図書館、英国図書館の30名以上、フランス国立図書館の20名弱などもあるのだが。比較的近年まで、これらスタッフの多くは、図書館ごとにおいば孤立した形で、限られた範囲内での研究や討論に限界を感じながら、資料の扱いやサービスについて試行錯誤を重ねてきたといえるが、アメリカにおける SLA 地理・地図部 (後述) に始まり、各種のサークルの結成がこうした壁を取り払い、各地での努力の有機的な結合が可能になってきている。さきに記した欧米の地図図書館訪問の際に出会った多くのマップライブラリアンたちが、いずれも地図図書館あるいはその「学」の発展を期して、国内外の「同業者」との交流に積極的に取り組んでいることには深い感銘をうけたものである。そうし

た交流の現況を概観しながら、それらの場で取り上げられているテーマにもふれてみよう。

地図図書館の経験が数の上でも歴史的にも限られている日本では、海外のこれまでの蓄積を取り入れる必要があるのももちろん、最新の課題や実践にふれるチャンネルを開いておくことも忘れてはならないことであると考える。

1941年にアメリカの専門図書館協会 (Special Libraries Association) の中に Geography and Map Group が創設された。これは1944年には構成メンバー約50名で Division に昇格し、現在に至っている。地図図書館の最初の交流組織である。当初の *Newsletter* は1948年から季刊の *Bulletin* となり、以来、地図図書館の研究や情報交換のセンターの役割をはたしている。第2次世界大戦から1950年代にかけての拡張期を経て、1960年代末から1970年代初めにかけて、カナダ、アメリカ西部、オーストラリア、ニュージーランド等にもグループが結成され、機関誌も創刊されている。イギリスの場合は、図書館協会ではなく、地図学の組織である British Cartographic Association の中に地図司書 (map curator) のグループがある。ドイツ、オランダなども地図司書のグループは地図学会に属している。

これらの各地での研究活動を背景に、IFLA (国際図書館連盟) は、1969年のコペンハーゲン大会で地理・地図図書館のサブセクションの設置を承認、1977年にはこれを専門図書館部会の一つのセクションに昇格させて、サブをとり除いた。地図図書館の連携が国、地方の単位から国際的規模にまで広がったわけで、地図図書館発展の流れのなかでの一つのエポ

ックといえることができる。セクション(サブの時代も含む)は、課題ごとのワーキンググループをつくり、地図図書館が共通してかかえる問題に取り組んでいる。

'*World directory of map collections*' の編集、IFLA の UBC 事務局との協力による ISBD (CM) (CM は地図資料 Cartographic Materials) 等の成果のほか、地図図書館員教育に関する検討や、地図図書館の設備についての調査等もテーマとなっている。年次大会における部会、ワークショップのペーパーは、開催地の地理・地図図書館事情のほか、それぞれの時期の問題意識を反映したものとなっている。近年の例をいくつか挙げれば、米国議会図書館における地図の光ディスク化、CARTO-NET System (地図の目録自動化と索引図画面による検索システム)、フランス国立図書館の地図入力、全国地図情報センター (National Cartographic Information Center: NCIC, USA)、スウェーデン国勢地図帳 PC 版の索引図画面による地図検索システムと地図の全国書誌など、目録の自動化や検索システムに関するものが多いが、全世界の地図出版の現況に関する調査の概報 (全容は *World mapping today* として1986刊、邦訳 正井泰夫「地図情報事典」1990) のようなものも見られる。

ヨーロッパでは、欧州評議会 (Council of Europe) との関連のもとに結成された、LIBER (Ligue des Bibliothèques Européennes de Recherche, 15か国、約400の研究図書館が加盟) のワーキンググループの一つとして、1980年前後から地図司書のグループ (Groupe des cartothécaires de LIBER 略語 GdC) が活動を開始している。構成国は1990年までは西

ヨーロッパ諸国に限られていたが、現在は中央ヨーロッパ、東ヨーロッパ諸国も加わるようになり、登録メンバーは約160機関という。現在、このグループの事務局長の任にあるオランダ国立図書館地区の Jan Smits 氏のご厚意により送付を受けた *Special Newsletter* No. 1 (1990. 12) ほかの資料によると、グループの活動はかなり意欲的で、図書館連絡委員会、地区司書教育などのワーキンググループを持つほか、メンバーになっている地区図書館の利用の態様の調査なども行い、また、母体である LIBER の運営についても意見書を提出（メンバー、ワーキンググループと本部の連絡強化など）したりしている。IFLA 地理・地区図書館部会との密接な関係のもとに活動することを目指すのが、IFLA の図書館中心に対して、こちらは文書館、博物館など図書館以外の地区コレクションにも輪をひろげることがを期している。現在の参加機関は図書館80%、残りが文書館、博物館、地区作成機関などとなっている。2年に一回の会合は今秋（1992、第8回）バルセロナで開催の予定であり、開催地の組織委員会の提案によるテーマは、地区の所在情報や、コレクションに関するダイレクトリー、ガイドの編纂や刊行促進など「地区の情報センター」機能を指向するものとなっているが、IFLA 地理・地区図書館部会（ストックホルム大会、1990）からの呼びかけに応える形で、「遡及入力」のセッション（IFLA バルセロナ大会、1993に報告を予定）も加えられる筈である。

さきの *Special Newsletter* No. 1 は参加各国の過去2年間の活動報告を集めたもので、コンピューターによる目録作成と検索システムは全般に共通する関心事

となっている。すでに稼働を開始しているイギリス、フランス、スウェーデン以外でも、それぞれのナショナルコレクションを中心に、初期の検討段階を終えて本格的な入力の体制に入ったか、あるいは入ろうとしている所が多く（スペイン、デンマーク、オランダなど）、次の共通課題としての遡及入力が提起されていることは上に見たとおりである。中央館以外の主要コレクションのシステム開発や中央システムへの参入、遡及計画、また、スタッフ養成（オーストリア、カタロニア、フィンランド、オランダ、スペイン等）、目録・書誌の編纂・刊行、展示会なども報告されている。これらの報告には見えていないが、将来的には、ヨーロッパ、さらにはヨーロッパ以外も含むオンラインによるカタログの共有も視野に入れているとのこと（英国図書館 Jim Eliot 氏談）で、EEC の図書館行動計画の一環として、英国図書館研究・開発部（Research and Development Dept.）が、ポルトガルをパートナーとして、英国図書館の地区目録データベースとヨーロッパの主要地区図書館とのレコード共有の可能性の研究に動きだそうとしている⁽¹²⁾。

北米においては、合衆国とカナダは、早くから共同のダイレクトリー *Map collections in the United States and Canada* (4th ed. SLA 1985刊、両国とも自国の単独のダイレクトリーもある) を作成するなど、緊密な協力関係にある。合衆国では、すでにほぼ半世紀にわたる SLA の Geography and Map Division を核に、Western Association of Map Libraries (WAML 1967-)、ALA の Map and Geography Round Table

(MAGERT 1980-), カナダでは Association of Canadian Map Libraries (ACML 1967-) がいずれも機関誌⁽¹³⁾を定期的に発行し、年次大会その他各種の会合をもって、情報交換や研究発表の場を確立している。この地域では、オンラインによる目録のネットワークもすでに長い経験を経てきており、OCLCのMap Users GroupとRLINのMap Special Interest Groupが合体したMap Online Users Group (MOUG 1979-) も組織されている。

なお、合衆国、カナダにイギリス、さらに、オーストラリア、ニュージーランドも加えた Anglo-American Cataloguing Committee for Cartographic Materials の活動の成果である *Cartographic Materials: a manual of interpretation for AACR2* (Chicago : American Library Association, 1982) は、AACR2/MARC の普及を背景に、標準化の難しい地図の目録記述の基本的な参考図書として広く用いられている。

終わりに

日本でも、このところ図書館、文書館の中に地図室、地図センターなどを開設しようという計画がいくつかたてられていると聞いている。地域性を強く持っている地図資料にとって、広汎なコレクションとともに、一定地域に強いコレクションが数多く存在することは非常に有用である。それらを総合する所在情報を完備することによって、さまざまな使用目的に適合する地図へのアクセスの可能性が一段と高まるのは確実であり、こうした最近の動きは心強い。‘Floundering

among maps’ (Badger, H.C. 1892)⁽¹⁴⁾ 以後、多くの先人たちの、努力と試行錯誤の上に築かれてきた地図の図書館学は、やがて、‘The emergence of maps in libraries’ (Ristow, W.W. 1957)⁽¹⁵⁾, ‘Map librarianship comes of age’ (Wallis, H. 1978)⁽¹⁶⁾ と、時代を追って図書館の中に定着してきた観がある。欧米の地図図書館の発展と、国際協力の進展を先例として学びながら、日本における ‘Emergence’ が、順調に育っていくための努力をしていく必要があると考えている。

これまでのところ、日本には、地図図書館(学)に関する包括的な教科書、概説書の類はないが、第2次世界大戦後の発展を受けて、欧米でまとめられたものとして、次のようなものがある。参考までにあげておく。

Map librarianship (特集) / Issue editor : J. B. Post. *Drexel Library Quarterly*. Vol. 9 No. 4 (1973) 90p.

Map librarianship : an introduction / by Mary Larsgaard. Littleton, CO. : Libraries Unlimited, 1st ed. 1978. 330p. 2nd ed. 1987. 382p.

Map librarianship and map collections (特集) / Issue editor : M. Larsgaard. *Library Trends*. Vol. 29 No. 3 (1981) 191p.

Map librarianship / by Harold Nichols. London : Bingley, 1st ed. 1976. 298p. 2nd ed. 1982. 272p.

Map librarianship : readings / Compiler : Roman Drazniowsky. Metuchen, N.J. : Scarecrow, 1975. 548p.

最後の, Drazniowsky は, 各種の雑誌等に掲載された優れた論文, 報告類50編弱を体系的に集めたものである。

付

本稿ではほとんどふれることができなかったが, 伝統的な紙の地図以外のマイクロ形態の地図やデジタルマップ, 地理情報システム等への対応は, 現在の地図図書館にとって大きな課題である。優れたシステムの開発やデータの蓄積は日進月歩で, より早く, より広く, より深い情報入手の可能性が得られることは, 歓迎すべきことでもあり, これらの活用の方法を追求することの必要性は明らかであるが, 一方, 図書館としては, 修正の自在な, 従って流動的なこれらの情報を固定し, 保存するという点についても, 考えないわけには行かないだろう。イギリスでは, 国の地図作成機関である Ordnance Survey が, 大縮尺測量図の数値地図への切替えを決定し, 1991年半ばには, 都市域について作成している1,250分の1図の全てについての作業が完成する予定であった(現状未確認)が, 国内の地図図書館のフォーラムである British Committee for Map Information and Cataloguing System (BRICMICS) は, 各時期におけるこれらのデータの保存を目指して, Ordnance Survey を交えた検討を行い, 紙, または少なくともアパチュアカード (Survey Information on Microfilms SIMS) により, 英国図書館をはじめとする納本図書館に, 随時蓄積することを実現している¹⁰⁾。また, 英国図書館はランドサットの画像など, リモートセンシングによる国土の状況の記録に

ついても, 自らデポジットライブラリーとして, 一定の選択を加えた上で, 適当な時期ごとに蓄積することを方針としている。これらの施策は 'national topographic memory'¹¹⁾ともいふべきものを伝承するという地図図書館としての目的意識に支えられている。

注

- (1) *The history of cartography* / ed. by J. B. Harley and David Woodward. Chicago : Univ. of Chicago Press, 1987-. vol. 1, p. xvi
- (2) 昭和9年9月28日~10月1日 東京朝日新聞 筆名 吉村冬彦(寺田寅彦随筆集 第5巻(岩波文庫) p. 5-8ほか所収)
- (3) A banquet of maps : an account of the map collections of the British Library / by Helen Wallis (*The Map Collector* No. 28, Sept. 1984, p. 2-10)
- (4) *Maps : a historical survey of their study and collecting* / by R. A. Skelton. Chicago : Univ. of Chicago Press, © 1971. p. 76
- (5) A brief history of the Library of Congress Geography and Map Division, 1897-1978 / by John A. Wolter et al. (*The map librarian in the modern world : essays in honour of Walter W. Ristow* / ed. by Helen Wallis and Lothar Zögner. München : K.G. Saur, 1979. p. 47-105)
- (6) Map library management / by Barbara Farrell and Aileen Desberates (*Information sources in cartography* / ed. by C. R. Parkins and R. B. Parry. London : Bowker-Saur, © 1990. p. 235-246)

- (7) *Cartographic materials : a manual of interpretation for AACR2* / ed. by Hugo I. P. Stibbe et al. Chicago : A. L.A., 1982.
- (8) *Manual of map classification and cataloguing, prepared for use in the Directorate of Military Survey, War Office* / by E. J. S. Parsons. London : War Office, 1946.
- (9) The greening of map librarianship / by Walter W. Ristow (*Bulletin, Special Libraries Association Geography and Map Division*. March, 1978, *The emergence of maps in libraries* / by Walter W. Ristow. Hamden : Linnet Book, 1980. p. 84-94 に再録)
- (10) *The Williams system of classification, cataloguing, indexing, filing and care of maps* / by U. S. War Department, General Staff. Washington, D.C. War Department, 1930.
- (11) *The classification and cataloguing of maps and atlases* / by Samuel W. Boggs and Dorothy C. Lewis. New York : Special Libraries Association, 1945.
- (12) Automated search and retrieval / by Barbara Morris (*Information sources in cartography*, 前掲 p. 276-277)
- (13) Western Association of Map Libraries : *Information Bulletin*. Map and Geography Round Table, ALA : base line : *A newsletter of the Map & Geography Round Table*. Association of Canadian Map Libraries : *Bulletin*
- (14) *Library Journal*. 17 : p. 375-377, Sept. 1892.
- (15) *Special Libraries*. 58 : p. 400-418, Aug. 1967.
- (16) *The map librarian in the modern world* (前掲) p. 107-116
- (17) *Special Newsletter* No. 1 / Groupe des cartothe-caires de LIBER. Dec. 1990.
- (18) The British Library's map collections and the national topographic memory / by T. Campbell (*The Cartographic Journal* 28 June, 1991 p. 27-29)
- (すずき・じゅんこ 地図室)